

**【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】**  
**2018年度 優秀園 審査委員特別賞**  
**札幌市立もいわ幼稚園**

本論文の実践はいずれも、友達や異年齢の仲間との関わりや互いの取り組みが刺激となって、対象への好奇心を膨らませ、興味を広げて探究に繋がる大きな契機となっていることが分かります。この「科学する心」と「仲間との協力の心」の繋がりが顕著に表れた事例は、他園の参考になる大変提案性のある実践です。

「ムシムシ研究所」の事例は、「この虫なんだろう」から始まった小さな疑問を、調べて知る喜びをきっかけとして虫への興味を深め、さらに他の虫の特徴や生態などの探究へと深まる過程が明確に示されています。研究所は、園の仲間が交流できる場所に作った環境の工夫と、保育者や保護者との密な関わりも相まって、共に探究する仲間との広がりをつかえることができます。虫の地図や図鑑作り、地域へのニュースの発信、園内の友達に伝える発表会など、子ども自ら取り組みを可視化する工夫からは、質の違う豊かな体験へと繋がり「科学する心」が、仲間を越えて他者にも広がったことが伝わってきます。

雪山の実践は、先行経験を生かし、気温や気象の状況で変わる雪山の性質を理解して、固める、滑る様にする、溶かすなどの目的に向かって、試行錯誤しながら友達と協同して、困難を解消していく姿や、自分たちが入れるトンネルを作りたいという、雪山の特性を生かしたダイナミックな活動にも展開しました。

また、地域に深く根差した取り組みとして、地域の人々の協力を得て、子どもたち自身が地域の方々と直接関わられるような保育を工夫したことから、体験は広がり、様々な活動に展開しました。子どもの「探究」に保護者が関わる姿からは、「保護者との研究の取組」にあるように、子どもの姿の保護者への発信の工夫に留まらず、日常的に子どもの変容や育ちなどの情報共有を丁寧に積み重ねたことによる成果と読み取ることができます。

加えて、一つ一つの場面の丁寧な考察の積み重ねや、明確な観点をもった子どもの姿の読み取りの工夫など、事例を振り返ることで“子ども理解”を深め、実態に添った援助と共に、環境構成・再構成の工夫に繋がっていることが分かります。

このような特徴的な取り組みが、子どもたちに多くの「気づき」「発見」「探究」をもたらし、さらに、「科学する心」の育ちに繋がられた保育の創意工夫が高く評価されました。今後も、地域の特徴を生かし、園全体で主題に繋がる保育を深め、子どもたちに「科学する心」が育まれることを願っております。